



TITLE:

[遠]州濱名湖の歴史地理學的考察

AUTHOR(S):

佐々木, 清治

CITATION:

佐々木, 清治. [遠]州濱名湖の歴史地理學的考察. 地球 1927, 7(2): 134-139

ISSUE DATE:

1927-02-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183227>

RIGHT:

は商業交通上の中心地となせると共に、三眼川一帯は鎮西の小京都とも稱せられ、一の遊覽地となし、旅館多し、流に沿

ひ建ち並び、一般に活氣を呈し青年期にあるものと云ひ得るのである。

遠州濱名湖の歴史地理學的考察

佐々木清治

緒言

で論及する積りである。

一、本邦描圖法發達史上に

於ける一貢獻

濱名湖は地理學上恰好の實習場であること云ふ見地から斯學のあらゆる分科に亘つて此の湖を研究することは興味のあるものである。湖畔佐濱即ち湖東三方原一帯は地球第一卷に於て横山助教授の古生物學並に層序學的研究があり、湖水の成因に關しては恩師辻村先生が其著『地形學』に於て述べられてゐる。湖沼學の方面の檢討は他日の機會に譲つて本稿に於ては主に歴史地理學的立場から此の湖を観察しやうと思ふ。

即ち往古に於ける描圖法の特相より始めて、地形の變遷を述べ、尙進んで歴史交通地理によ

遠江濱名淡海圖

(上略) 外院ニ吳松ノ廣浦ハ爲ニ青龍ト智婆ノ長岳ハ爲ニ白虎ト東海ノ大道ハ爲ニ朱雀ト贊代ノ高山ハ作ニ玄武ト隣徒悉泳ヲ思ニ四大海ニカト翼類咸ク翔ヲ疑ニハ

即ち坎艮震巽離坤兌乾に配するに十二支を以てしその上に十干を織込んだことである。空海以前已に坎艮等と十二支とを用ゐて方位を表してゐた。しかるに十干を配合したことは余寡聞にして空海以外にその例を知らぬ。寅卯辰は木（甲乙）に屬し東方に配し、巳午未は火（丙丁）に屬し南方に配し、申酉戌は金（庚辛）に屬し西方に配し、亥子丑は水（壬癸）に屬し北方に配すといふ説から十二支の間に十干を織込んだ空海の獨創によるものと推察される。

次にまたこの圖によつて平安朝時代の湖畔聚落分布の狀態を想知し得る。現今の濱名湖畔の地圖と對象するに敷智は明治廿九年濱名郡へ併合され、和知及び雄踴は現今の和地・雄踏の地、柴江は佐鳴湖を指すものならん。栗原は引馬の驛即ち濱松、比美は吉美で鷺津附近を云ふのであらう。濱名郡家は湖西の地參河との境界に縁れる聚落、贄代は西濱名の鵜代・尾奈一帯を總稱し、引佐郡家は氣賀方面の聚落を指すのであらう。尙青龍・白虎・朱雀・玄武の四神を以て東

西南北の方位を表せるところは濱名湖四近に於ける四神相應の貴い地相を意味したものと思惟される。

空海がこの地圖を作製したのは嵯峨の御宇で凡一千百五十年前のことであらう。書本奥の記に載せた建久元年は七百三十六年前また明和九年は百五十四年前である、斯くの如くこの圖は僧侶によつて轉寫されたもので原圖の所在が明確でないが余が色々探索した結果石山寺の所蔵するところらしい。

空海以後徳川時代末までに濱名湖關係の古地圖は種々の古文書によつて見得るのであるがいづれも繪畫的鳥瞰圖であつて地圖としては價値の少ないものである故にこゝでは省略する。たゞ遠江風土記傳所載の圖に湖形を頗る正確に描いたもののあることを附言して置く。

二、濱名湖口の變遷

濱名湖がその成因上海岸平野隆起後の差別的沈降によつて海水が侵入して形成されたものであつても、その後波に運ばれた砂土は湖口を全

く閉塞して終つたことは古文書に由つて明かである。たゞ濱名川の一水によつて僅かに湖海を連絡してゐたに過ぎない。此川は西南に流れて橋本小松茶屋の間を通つて帶ノ湊に到つて外海に注いで居たが後に述べる明應の變に埋没して今は西川の名残を存するのみである。此湖口の閉塞は古代より其常なく幾多の變遷のあつたことは文德實錄角避比古神社の記事應永・文明・明應・永正・元祿・寶永の地變により明かである。文德實錄には『湖有一口、閉塞無常、湖口塞則民被水害、開則民致豐稔、或開或塞神實爲之』。とあり。角避比古神社の角避とは津開の意味で湖口の開析を司る神靈を神社として祀つたものであらう。

現今の新居は往古濱名湖中に突出せる安禮之崎にあつたもので、安禮之崎は濱名川の入口に位して附近波浪荒かつたため荒江荒井等の地名が生じた。萬葉集高市連黑人歌に『何所爾可、船泊良武、安禮乃崎、榜多味竹之、棚無小舟』といふことから推察出来る。

湖口は應永十二年（二〇六五年）津浪のため少し切れ、文明七年（二二三五）大津波でまた切れ明應七年八月廿五日（二二五八）大地震大海嘯で湖海を隔てる砂濱決潰して今切湊口を生ず。また永正七年八月二十七日大津波で湖口全く缺潰す。かくて淡水湖は變じて鹹水湖となつたのである。

地變の如き自然現象で關所や城町が幾度も移轉したことは人文地理上面白い問題である。今切番所は慶長五年に設置されたのでその以前天正十七年（二二四九）の駿遠大地震には關係なかつた。その後元祿五年（二二五二）及同十二年八月十五日（二三五九）再度の大海嘯には何れも床上三尺の浸水を蒙つて人畜の死傷家屋船舶の流失尠くなかつたので移轉の議起り同十四年に關所及び城町は藤十郎附近に移轉して之を中新居と稱した。寶永四年十月四日（三三六七）の大地震大海嘯では新居家數八百五十軒の内二百四十一軒流失・百七軒潰倒・高百七十石の内新田七十石分が荒廢・渡船百十艘中四十艘流失・獵船五十

艘破損溺死二十一人この災厄を被つたため翌五年住民一般現今の新居の位置に移轉した。安政元年十一月四日(二五・一四)の大地震では津嘯を伴ひ津波は松本新田の南部より入込み東方湊口から來たものと御船小屋前で相會し新居橋本の南部は忽ち狂瀾怒濤の荒海と化して家屋の潰倒百八軒を算した。

三、瀨名湖畔に於ける往古

の交通状態

湖内の航路に就いては文獻少きため茲に述べることとは出來ぬ。湖畔の陸上交通を史的に考究すると彼の日本武尊の東征巡路は古地圖によると湖北であつたらしい。元正聖武帝當時の通路も湖北であつたが本坂街道が開通して二見路と稱したのは淳和帝天長年中であつた。この時代には三箇日から鞍骨峠を経て井伊谷に通ずる道路も完成した。現今東海道線の通過せる湖南方面の交通が發達したのは後世のことだが、前文『東海大道爲朱雀』より推考して、已に平安朝時代には天下の公道であつたらしい。清和帝貞觀

年間に瀨名橋を修造したといふ記事もある。この時代には湖西の白須賀の位置は現在とは異つて今の元宿の處にあつたのである。(註須賀とは砂の堆積したもので即ち砂丘のことで遠州には須賀の名を附した地名が多い。白須賀もその一つであるが現在では砂丘らしい上にはなくて洪積層上に位してゐる。これはもと現今の元宿にあつたが前述の寶永四年十月四日の大海嘯に流失の厄に遭ひ潮見坂上に移轉したものである。)こゝを經、瀨名橋を渡つて往來が出來た。立派な瀨名橋の架せられたのは陽成帝元慶八年九月の事で長さ五十六丈廣一丈三尺・高一丈六尺と云はれる。爾來波浪のため破壊し或は火災によつて燒落ち修覆十一回に及んだとのことである。更科日記を讀むと下向には瀨名橋を渡つたが上洛の際には入江には橋がなかつたことが分る。建久二年頼朝もこの橋を通過したことがある。一九〇〇年代定家はこの橋の歌を詠じ當時京都より鎌倉に至るには矢作・豊川・橋本・池田・掛川の道筋で即湖南を通過してゐた。かくて地勢平坦な湖南の交通は益々頻繁となり慶長九年(二一六〇)に今切番所出來箱根の關と共に東海道で重要視されるや

うになつた。この關所で京都又は江戸への出入を警護し各地逃亡の罪人浮浪者等を取押へ、一面交通の取締りをなした。特に女子を嚴重に吟味したので婦女子は大抵湖北山地を通つた。こゝには氣賀關・金指關設けられ所謂姫街道とな

つた、新居關が他の關と異なる特色は海邊地改めのことでこれは領主の替り目及び一定の時期を定めて海岸の實地調査をする目的で役人を巡視させたのである。(大正十五年十月二十八日稿)

地球の大形態成因に關する『楔狀說』に就いて(上)

帷 子 二 郎

一、緒 言

此の說は R. T. Chamberlin が The Wedge Theory of Diastrophism と題して The Journal of Geology の第三十三卷第八號の卷頭に掲げた論文である。地表大形態成因に關する纏つた說として最近ハールマンの論文はあるが此の楔狀說も見逃の出来ない一つである、併し是れは結局コーベルのオロゲン法則を批判しこの說の適用の範圍をコーベルの想像する一造山帶に於

て更に小區域に限定し而て臺地、大陸の成因に迄も敷衍した事である。即ち地球の凡ゆる大形態は楔狀の地殻片の運動に因るといふのである然れども褶曲帶に於て實證を興へた楔狀說は臺地、大陸形成への適用に至つては未だ其の說の甚だしく想像圈内にあるを思はしむるのである大陸内の造山運動に於てアルガンは深部褶曲の楔狀構造なると兩側の顛倒を教へてゐるのであるからチェンバリンの敷衍は獨特のものとも思